

2022 年コスタリカ大統領選挙 —市民行動党政権の終焉とチャベス政権の誕生

白方 信行

はじめに

コスタリカは1949年以降、政権交代が中断することなく行われてきたラテンアメリカでは最も民主体制が維持されてきた国の一つである。しかしながら、国民解放党（PLN）とキリスト教社会統一党（PUSC）の二大政党体制が、汚職や放漫な財政運営の結果行き詰まり、2014年からは中道左派の市民行動党（PAC）が政権を握った。2期続いたPAC政権も、経済状況の回復、貧富の差の解消等の実績を上げることはできなかった¹。このような状況下で、2021年、大統領選挙プロセスが始まった。本稿では同選挙プロセスを振り返りながら、今回の選挙結果の分析を行っていく。

与党「不在」の選挙

2021年当初の時点では旧二大政党の政権が復活するのか、新たな勢力が出てくるのか、不人気のPAC政権が土壇場で続投を決めるのかというのが選挙の大きな焦点であった。また、PAC政権を特徴づけてきた、LGBT（性的少数者）政策、脱炭素化など気候変動対策の推進、核禁止条約推進等「進歩主義」的政策が新政権によってどうなるのかが、国際的な視点では重要な点と見られた。

2018年からのアルバラード政権は少数与党として現実路線をとらざるを得ない状況にあった。PACらしい政策としては同性婚合法化、治療目的の中絶手術の実施規則制定を行い、2050年までの脱炭素化計画を掲げ、首都圏電気鉄道計画も進めた。また経済開発協力機構（OECD）加盟を果たした。しかし、支持率は一時期を除いて10%台から20%台の低いレベルで推移した²。その上、緊縮財政を行う前提で、国際通貨基金（IMF）との借款交渉をまとめ、その一つとして公務員雇用法改正案の成立を進めたことが、党内外から批判された。2021年8月の同党大統領選挙予備選では同法改正に反対する少数派であるウエルメル・ラモス国会議員がアルバラード大統領の後継者である「進歩派」のカロリーナ・イダルゴ

議員を1ポイント差で破った。国会議員候補予備選もほぼラモス派が勝ち、党執行部も同派に独占された³。ラモス氏は大統領候補になった後も、政権批判を続けた。実質的に与党候補「不在」の選挙、つまり野党が批判すべき相手がいない選挙になってしまったのである。

チャベス候補の出現と「セクハラ処分」問題

前財相のロドリゴ・チャベス氏（現在60歳）が立候補を模索していると執筆者が知ったのは2021年2月であった。世界銀行での長い海外勤務の後、財相となったが7か月で辞任した同氏は政治家としては無名の存在だったが、財政通を看板にして中道右派連合候補になろうとしていた。中道右派のポジションには有力候補はまだ誰もおらず、中道右派票を集集できれば、当選の可能性が高いと見られていたからである。しかし、候補者一本化の協議は物別れに終わった。同年7月チャベス氏は無名のミニ政党社会民主進歩党（PPSD）から単独で立候補することになった。国民が驚いたのは、PPSDにテレビ局テレビカの元女性ニュースキャスター、ピラール・シスネロス氏がサンホセ県の国会議員候補として参加したことである。

しかし、8月末、コスタリカを代表する新聞『ラ・ナシオン』が「チャベス氏、世銀インドネシア事務所長時代に、インドネシア人職員2人に対するセクハラで処分されていた」と報じ、潮目が大きく変わった。女性の人権擁護に積極的なPAC政権のもと、世界的な「me too」運動とも呼応し、コスタリカでは女性への性的嫌がらせに対する国民の目が一段と厳しくなっていた。チャベス氏は、「ラテン社会ではよくある発言が文化の違いから誤解されただけのものであり、不適切な発言で処分されただけで、セクハラで処分されたわけではない」と反論したが、2020年に性的からかいの言葉をかける「ピロポ」も犯罪とする法律が制定されており、この反論は苦しく、選挙公示前にチャベス氏の当選の可能性はなくなっ

たと大方の専門家は予測した。

第1回投票

10月1日に大統領選が告示された。チャベス氏以外の主要候補は、ホセ・マリア・フィゲーレス候補(PLN、中道:元大統領)、リネス・サボリオ候補(PUSC、中道右派:元副大統領)、ファブリシオ・アルバラード候補(新共和国党(PNR)、福音派:元テレビ司会者)、ホセ・マリア・ビジャルタ候補(拡大戦線(FA)、左派:国会議員)であった。11月発表の世論調査ではフィゲーレス候補が19%、サボリオ候補が8%、アルバラード候補が5%の支持率で、チャベス候補は3%で5位にすぎなかった。この時点で、第1回投票での当選に必要な40%の得票にはどの候補も届かず、決選投票になり、かつフィゲーレス候補の決選投票進出は確実と見られた。しかし、選挙前から、同候補は決選投票では、過半数を取る力はなく、福音派のアルバラード候補、左派のビジャルタ候補以外が2位候補になった場合は不利との予測があり、焦点は2位争いになった。

フィゲーレス候補は最大政党 PLN の候補であり基礎票が最も多く、各界のブレイクも擁していた。しかしながら、前回の大統領任期後の仏アルカテル社からの収賄疑惑事件で、元大統領の中で「唯一訴追を免れた」と国民に見られていたこと、及び母親の生前贈与を巡る親族間での争いも抱え、放言癖もあった。また、同候補が予備選に勝つために手を組んだ党内の「市長派」の市長らが、選挙中に市道汚職、及び麻薬組織と関連する犯罪で相次いで逮捕された。しかも、国会議員候補の大半は「市長派」系であった。同候補は8年間のPAC政権を批判したが、財政危機、経済格差の拡大は、同候補が大統領だった時代を含め歴代 PLN 政権に原因があるとの認識が多くの国民にはあった。

チャベス候補は、汚職撲滅の他、公共料金の政令での即時値下げ、財政改革関連で国会議員が望まない法案は国民投票に訴えて実現するなど奇抜だが国民受けする政策を訴えた。同候補は「指導力のある財政通」、「強い男」として若い男性層を中心にじわじわ支持を伸ばした。しかしセクハラ処分問題によって有権者の拒否感も強かった。また、予算、借款等のテーマを国民投票で問うことは憲法で禁止されていることから、同候補の公約自体が三権分立への挑戦で、目的のためには民主制度を破壊しかねない候

補であるとの専門家の批判も出た。この苦戦を支えたのがキャスター時代に女性に人気があったシスネロス国会議員候補で、同候補があたかも大統領候補であるかのように地方を回った。



写真1 チャベス大統領候補のインターネット用選挙ポスター。シスネロス国会議員候補の写真が入っている(チャベス陣営 HP <https://www.rodrigochavespresidente.com/> から)

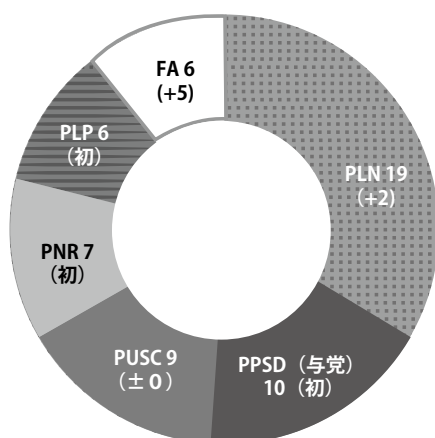
しかしチャベス候補はテレビの討論会では、候補としての資質が問題にされる言動をとった。他候補の過去の処分歴を公にする、知能程度をばかにするなどの行動が続き、ヒール役になった。その上投票日2日前、2月4日のテレティカのテレビ討論会では女性のサボリオ候補が「処分理由となったあなたの発言は具体的には何か」と執拗に攻めてきた際に「『6種の動物と乱交パーティーをしよう』と、コスタリカ人なら普通言うような冗談を言っただけだ」とキレながら答えた。後日、「あれでチャベスは終わったと思った」と複数の専門家が執筆者に語った。その直前に発表された最後の世論調査でも、フィゲーレス候補が17%、サボリオ候補が13%で、アルバラード候補が10%、チャベス候補は4位の8%だった

ところが、2022年2月6日の第1回投票でフィゲーレス候補は27%、チャベス候補は17%で2位となり決選投票に残った。投票率は過去最低の60%だった。専門家、マスコミはいずれも予想を外した。世論調査でチャベス支持と答えず同候補に投票した層がかなりいたとしか説明がつかなかった。投票したのは「フィゲーレス候補に対抗できる唯一の政策通」と考えた層や、「処分問題は過去のことであり、マッチョな態度は、国の指導者として必要悪」などと割り切った層であったと推測される。

2ポイント差で3位に終わったアルバラード候補は、福音派の票をまとめたものの、ビットコインの「採掘」の産業化、「キューバの教育行政への影響の遮断」などの奇抜な政策を掲げたのみで、同性婚合法

化に反対し第1回投票で1位になった前回大統領選挙のような、票を稼げる争点が無かったことが大きく影響した。サボリオ候補は、PUSC が弱体化している上に本人が公約に対する質問にまともに答えられなかったことから、候補として不適格と判断され多くの票をチャベス候補らに奪われたと見られる⁴。同時に行われた国会議員選挙（県ごとの比例代表制。定数 57）は下の図のような結果となった。PPSD のシスネロス候補は当選し、同党議員団長に内定した。PAC は当選者ゼロとなり党存続の危機を迎えた。

図 国会議員選挙結果（定数 57）
（カッコ内は前回選挙との比較。「初」は初の議席獲得）



出所：最高選挙裁判所（TSE）

決選投票

フィゲレス候補は、チャベス候補を antisistema（反エスタブリッシュメント）呼ばわりした。チャベス候補は政策での議論をとフィゲレス陣営に呼びかけた。しかし、政策的な大きな争点はなく、選挙戦は泥仕合となった。フィゲレス候補は討論会でチャベス候補個人への選挙資金問題を批判し「この男に投票すれば、手錠でつながれて大統領府から去る姿を見ることになる」と有権者に訴えた⁵。翌日の討論会でチャベス候補はフィゲレス候補に認知していない子供がいるとの噂まで持ち出した。他方で、両候補とも福音派の票を狙い同派に近づいた。またフィゲレス候補は、会計責任者を連れてドミニカ共和国を訪問した。この件が明るみになった際、アビナデル大統領らと「ウクライナ情勢によるガソリン高問題を話し合った」と弁明した。両者の政策の具体的な違いは明確にならないまま、チャベス候補やや有利の接戦状態が続いた。



写真2 決選投票当日、投票会場であるサンホセ近郊の学校前に開かれたPLNの案内所。各支持者に該当する投票箱がある教室の場所を教え、選挙グッズを配っていた。各党の案内人は校内にも入れる。第1回投票時にはコロナ禍を理由に設置が禁止された（執筆者撮影）

4月3日に投票が行われ、チャベス候補が53%の得票でフィゲレス候補を下した。投票率は過去最低の57%であった。肯定的に見ればPLN、PACが行った既得勢力の利権にはメスをいれず経済を一部自由化した発展モデルの恩恵を受けていない多くの国民がチャベス候補に賭けてみたことが勝因と言うことができよう⁶。しかし世論調査では約70%の有権者が、どちらの候補にも本当は投票したくないと答える特異な状況で投票が行われ、有権者が消去法でチャベス候補を選んだとも言える結果であった。

フィゲレス候補は、同性愛者であり LGBT の人権擁護に取り組んできたラウラ・アルゲダス氏を副大統領候補に起用しながら、福音派に接近しジェンダー教育を批判したことで中道左派、左派からの支持を広げることができなかった。皮肉にも福音派票はチャベス候補に流れた⁷。ドミニカ共和国訪問は、違法である「外国人からの資金援助」疑惑を生んでしまった。3期連続でPLNは政権を取れず、コスタリカの民主体制確立の中心であった同党のさらなる退潮を示す結果となった。

今後の展望

5月8日チャベス大統領が誕生した。就任演説では、選挙中と変わって穏やかに国民の和解と国家の再建を説くとともに、女性、LGBT の権利擁護も公約した。



写真3 就任式で演説するチャベス新大統領（在コスタリカ日本国大使館撮影）

大統領府相に元リパタリアン運動党議員で今回の大統領選で自身の党から立候補していたナタリア・ディアス氏（女性）を置き、ほぼ全ての閣僚は人材派遣会社を通じて同氏を中心に選考するという異例の方法で組閣が行われた。就任式直後の閣議で、マスク着用・新型コロナウイルス感染症（COVID-19）ワクチンの接種の義務化、コメの最低販売価格保証制度をいずれも撤廃する政令を成立させた。各界から大きな批判が出ただけでなく、ワクチンの政令は専門機関の承認を得ていなかったこともあり撤回された。初日から「強い」大統領としての「実行力」を見せることができたが、有識者は「政策決定の手続き」を守らなかったとして懸念を示している。チャベス大統領のPPSDは国会では10議席のみの少数与党である。今後与党は、法案ごとに各野党と交渉を行っていく必要があり、国会運営は厳しいものとなろう。野党と対立した際に、公約通り政令制定あるいは国民投票により自身の政策を通そうとするのか、また、そのような姿勢を国民は支持するのかが、長く続いたコスタリカの民主体制への影響も含め一つの注目点となろう。

（本稿に示された意見、考察等は全て執筆者個人の見解であり、所属する組織の公式見解を示すものではない。）

- 1 政府発表によると、2021年のジニ係数は0.524と過去10年で最高値を記録し、ラテンアメリカでも有数の高い数値となった。インフォーマルセクターの労働者が46%（2022年1月時点）であることが大きく影響している。

- 2 本稿で使用する世論調査の数字は全てコスタリカ大学政治調査研究センター（CIEP）発表のもの。
- 3 ラモス候補は他派からの支持は得られず、0.66%の得票で10位に終わった。
- 4 サボリオ候補は有力候補と見られていなかったネオリベラルのエリエセル・ファインザイク候補（自由進歩党：PLP）にも抜かれ5位に終わった。
- 5 選挙法で候補個人への献金は禁止されている。
- 6 チャベス候補は貧困地域であるカリブ海及び太平洋沿岸地域で圧勝した。
- 7 選挙後の世論調査の結果による。チャベス候補は自らを「神を恐れる人間」と述べ、中絶禁止の立場を表明し、3月、治療目的の中絶手術の実施規則見直しを福音派宗教者の集会で約束した。

（しらかた のぶゆき 在コスタリカ日本国大使館参事官）